

30 【ぬらりひょん】

秋のある日、夕方遅くなって学校から帰ると、母親はいないで変なおやじがいたものでした。

床の間の前で、あぐらをかいていました。

母親の茶碗で、お茶をすすっていました。

すする音は、巨大な滝の音に似ていました。

どどっ

どどっ

どどどんどん

ずっどどどんどん

この音は冷気とともに、ぼくのからだをふるわせます。

和服を着ていかにも堂々としているから、もしかして会ったことのない伯父（おじ）さんかと、いちおう挨拶をしたけれども、えらそうな咳ばらいが返ってきただけ。

茶をすすりおえると、おやじは腕を組んで、口をへの字にしました。

こんなえらそうな親戚（しんせき）がいたらいいな、いいけどおそろしいな、おそろしいけどおもしろいな、などとぼくはかんがえていました。

それにしても、禿げた頭がでかい。

西瓜（すいか）よりも南瓜（かぼちゃ）よりもでかい。

りっぱだのう。

かっこいいのう。

五分間ぼくは、その禿げ頭にみとれました。

ぼくが母親を捜しに、近所まで行ってみつからずに戻ると、おやじはもういない。

あとで母親にきくと、

「金ちゃんに、伯父も叔父もいるわけない」

といました。

わけといったわけを知りたかったけれども、それどころではありません。

それなら村長か。

村長が頭がでかくなる病気になったのか。

「村長は、行くべき用があって、行くべきところへ行っているよ」

母親は意味深（いみしん）にいました。

それならぼく、も行くべきところに行かなければ。

「【ざしきわらし】かのう」

だいたいの説明をしてから、ぼくは懐爺にききました。

「【ざしきわらし】は、こどものおばけです」

「ならば【てんぐ】かのう」

「【てんぐ】なら、大きな鼻をしていますよ」

「おおきなあたまをしとった」

「【ぬらりひょん】にまちがないです」

懐爺は断定しました。

「【ぬらりひょん】かい、ばかにしたなまえじゃのう」

「ばかにしてはいけません。あれでもおばけの大親分ですよ。わたしは昔、南の方に旅をした際に、海でみたことがありましたよ。禿げ頭に似た大きな玉が浮かんでいるので、つかまえようとすると、ぬらりとはずれて、またからかっているのか、ひょんと浮いてくる。それで【ぬらりひょん】。海の人【うみぼうず】なんていっていますが、何でもかんでも【うみぼうず】ですから。わたしだって海でおよげば【うみぼうず】」

「うみのおばけが、いえにまでやってくるんかい」

「最近、公害やなにかで海も汚れていますからねえ。おいしい食べ物が少なくなったのでしょ。それでたまに家にまでやってきて、座敷で飯くったりお茶のんだりするんです」

「ずうずうしいおばけじゃのう。きもちわるいおばけじゃのう」

ぼくは【ぬらりひょん】をおもいだしながら、伯父か叔父かとおもいこんだ自分に腹立たしくなりました。

つまりつまり、

（伯父か叔父だったらよかったのになあ）

というおもいで腹立たしくなったのです。

「金ちゃん、今日のごきげんがわるいようですから、いいものをあげましょう」

懐爺はぼくの機嫌をとりました。

「また、あんこだま、かい」

「今日はお札ですよ」

懐爺の手には、たしかにお札らしきものがありました。

「なんじゃい」

ぼくは食べ物ではなかったことで、いっそう不機嫌になりました。

「おぼけ除けのお札。ありがたいありがたいお札です」

よせばいいのに懐爺は、お札を拝んだのです。

「わしは、おぼけがすきなんじゃ。おぼけをよけるおふだなんか、いるかい」

強がり半分本心半分で、ぼくはいいました。

かくべつ、この【ぬらりひょん】は、素敵（すてき）だったものです。

「それはわたしもわかっています。でも金ちゃん。たとえばさ、金ちゃんだって何かと忙しいときもあるでしょう。おぼけにくわれる前にごはんくいたい場合だって、いずれくるかもしれないでしょう。そういうときに、このお札を出して、またあとにしてくれ、というんですよ」

「さんどのめしより、おぼけがすきじゃ」

ぼくは一日三度の飯をくったことがないから、この台詞（せりふ）は嘘だとおもいました。

「しかたありません。このありがたいありがたいお札は、わたしが持っていることにしましょう」

「それで、いいのだ」

珍しく懐爺は、腕を組みました。

珍しく懐爺は首を、傾（かし）げました。

「それにしても金ちゃんは、擬声語（ぎせいご）擬音語（ぎおんご）のおぼけによく遭遇しますねえ。【うわん】とか【けらけらおんな】とか【ぬらりひょん】とか」

「わしは、ぎせいしゃ、なんか」

ぼくはききました。

「犠牲ではなくて擬声擬音、つまり声とか音で、その名前がついたおぼけです」

「おぼけは、たんじゅん、なんだのう」

ぼくはえらそうにいいました。

「そうかもしれません。おぼけは単純だから、こわくもありおぞましくもあり懐かしくもあり優しくもあります」

「そうかのう、そうかのう」

ぼくも首を傾げながら、次のおぼけに出逢うことを、心から待ちのぞんでいました。